

総括コメント

独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）

調査部主席研究員 本村真澄

本日は泉田新潟県知事をはじめ、6件の基調講演、16件の発表がなされ、大変盛況なシンポジウムとなった。資源をめぐって日本とロシアは補完関係にあり、この日露エネルギー環境対話イン新潟でも、回を追うごとにその関係が着実に深まっていることを感じる。

基調講演

まず、外務省欧州局の石川日露経済室長には、直近のロシアの政治経済情勢の概括をご説明いただき、原油安で金額は減っているが、日露ビジネス協力が拡大基調にあることが示された。

ザグミョンノフ在日ロシア通商代表部副首席代表からは、極東地域での日ロ協力事業をご紹介いただいた。さらに、エネルギー・ブリッジや水素など、伝統的な石油・ガス以外についても日本と互恵的な協力関係のアイデアのご紹介があった。

資源エネルギー庁の定光石油天然ガス課長には、現下の日本のエネルギー政策、特に市場競争を促す政策についてお話しいただいた。そして日本の石油・ガス調達の分散化という方針のもと、昨年はロシアからの石油輸入が日本全体の8.2%、LNGが9.5%と、年々その存在感を増している状況のご説明があり、中東依存度の引き下げがロシアとの関係強化により実現していることが実感された。

テキエフ沿海地方議会副議長には、老朽化等で厳しい電力事情と今後の対策についてご報告いただいた。日本企業にとっても、従来の石油・ガスにとどまらず、風力、太陽光、コージェネなどを含め、今後も長期的な関係を強化してゆくべき部門と考える。

東京財団の畦森研究員からは、ロシアで影響力を強めている中国ファクターに関して、実際はロシアの側として、できる限り中国に対する独自性を維持したいと考えており、日本との関係強化の持つ戦略的な重要性はますます高まるとの大変元気の出るご指摘をいただいた。

野村総研の植村上級研究員からは、ロシアのGDPの中で家計消費が約3分の2を占め、景気変動に対しては頑健でありGDPの下方硬直性がある、中国とは大いに異なるとの大変興味深い指摘がなされた。

セッションA：日本の電源構成と日ロ協力

－在来型エネルギー

ロシア科学アカデミー・エネルギー研究所石油ガス部門長のミトロワ博士は、ガス分野での日ロ協力の焦点を当てて、ロシア産ガスの競争力についてお話をいただいた。特にサハリン2第3トレーンで100万英国熱量単位(MMBtu)当たり6.7ドル、さらにサハリン－日本パイプラインで7ドルというご指摘には、関係する各方面でも大変興味を持たれたものと思われる。

東北電力の小村燃料副部長からは、2011年の震災以降はロシアからのLNG輸入をコンスタントに増加して来たこと、そしてロシアのLNGに関して、多様化の視点、距離的な近さ、特にここ新潟の近さから、将来にわたっても重要な供給ソースと位置付けておられるのご報告をいただいた。

中部電力上越火力発電所の佐藤副所長からは、上越火力発電所のガスタービンと蒸気タービンとのコンバインドサイクル発電設備のご紹介をいただいた。特に、サハリンからのLNGがわずか3日で来るという非常に重要なご指摘をいただいた。

三井物産の宮沢燃料ガス第4部長からは、サハリン2プロジェクトの経緯を詳しくご報告いただき、大変有益だった。ロシア極東の資源量、そして日本への距離的な近さが持つ供給地としての価値を早くから見いだされ、1990年代のLNG価格の安い時代に、粘り強く顧客開拓の努力を続けられ、最終投資決定に漕ぎ着けられたプロセスは、関係各方面においても大変教訓に満ちたものと思う。

沿海地方のコワリョフ産業局長からは、沿海地方でのガスの消費量の伸び、ガス化の進捗がご報告された。2011年9月にサハリン－ハバロフスク－ウラジオストク(SKV)パイプラインが開通し、2012年12月には東シベリア・太平洋(ESPO)パイプラインが全面開通した。その後、順調な発展がなされているとの印象を受けた。

東京ガスの清水グループマネージャーからは「LNGバリューチェーン」の高度化という面から、非常に盛り沢山のご報告をいただいた。さらに、2016年からの電力小売り完全自由化を踏まえた発電事業のご紹介があり、この業界の活力を感じることができた。

日本産業プロジェクト協議会天然ガスインフラ整備・活

用委員会の青山委員長からは、ロシアから日本へのパイプラインによるガス供給に十分なコスト競争力があり、さらに大陸のガスパイプライン網と接続することにより、価格以外にもエネルギー安全保障の観点から価値があるとの重要な指摘があった。

日揮の鈴木取締役からは、LNG価格の下落による、LNGの需要増の期待が述べられた。また、極東での安価なガスを利用したハウス栽培など、広い分野での活用に触れられ、新しい可能性が感じられた。

商船三井LNGプロジェクト部の濱崎グループリーダーからは、いま最も注目を集めている「北極海航路とLNG輸送」に関して、お話を伺った。特に、北極圏に賦存するエネルギー資源へのアクセスの可能性、つまり北極圏が通過圏(Transit)としてだけでなく、資源の賦存する地域であり、航路の確立によって資源開発の目的地(Destination)としての価値があるとの指摘をいただいた。

ベルクト社のポコチーフ社長からは、今後西シベリアの深い層のガスの開発が増えることから、LPGターミナル建設計画のお話をいただいた。随伴ガスの利用率を95%以上とするロシア政府の政策のもと、急拡大するLPG市場の動きが伺え、大変興味深い計画であると思われた。

セッションB：日本の電源構成と日ロ協力—新エネルギー・電力

サハ共和国のコロデズニコフ民生サービス電力大臣からは、広大な国土に分散した人口配置という困難な条件の中で、各地域で太陽光による再生可能エネルギーの発電を行い、地域ごとの消費という分散型の電力モデルを実現させているとの話を伺った。これは、今後のユーラシア大陸の人口の少ない地域においてモデルケースになるものと思われる。

川崎重工の三浦理事からは、80%という驚異的なエネルギー効率を持つ中小規模のガスタービンが、APECを機にウラジオストクで活用されていること、さらにサハ共和国の永久凍土地域でコージェネへの切り替えを進めていると

のご紹介があった。日本の技術が、ロシアで有効活用されている例として、大変心強く感じた。

駒井ハルテックの駒井インフラ開発本部長からは、サハリン、カムチャツカでの電力供給のコスト削減を目指して、寒冷地仕様の風力発電によるマイクログリッドシステムの導入に取り組んでおられるとの話をいただいた。地域住民への配慮など、地域の特性を良く把握された活動との印象を受けた。

極東石油ガス研究所のグリコフ所長からは、バイオエネルギーとしてのペレット、木炭等による森林資源の活用例が紹介された。ユーラシアのタイガ地帯の特質を生かした代替エネルギーとして、大変に説得力を持つ方式と思われる。

イルクーツクのエネルギーシステム研究所のイワノワ遠隔地エネルギー供給研究室長からは、中央から外れたロシア東部での再生可能エネルギーの活用の概況をご説明いただき、具体的にはバイカル湖畔での環境保全の試みのご紹介があった。日本としても当然、協力できる分野かと思う。

中部大学の福田教授からは、サハリンのコルサコフから日本海側の柏崎までを国際電力連携線で繋ぐという、大変気宇壮大な構想を伺った。たとえばガスパイプラインの場合、政治的な供給がウクライナという通過国ではあったが、最終目的国・地域に対してはなかった。この部分の議論、つまり信頼性の議論が今後は必要かと思うので、さらに議論を進めていただければと思う。

この、「日露エネルギー・環境対話イン新潟」も、今回で8回を数えるまでになり、本日は150名の参加者があるなど、大変盛況であった。日ロのエネルギーと環境分野での専門家が一同に会し、このように意見交換できる場が恒常的に設けられていること、それが年々進化していることは大変重要なことである。ご関係の方々の大変なご努力があってこそと、主催者の新潟県・新潟市・ERINA、またロシア側の参加者の皆様へ改めて感謝申し上げます。